

2010 年度秋学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	社会福祉	学科
担当科目	ファーストイヤーセミナー、社会福祉学基礎演習		

<秋学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

私の印象としての主なチューターがやることの印象は、「とりあえず朝授業開始までに教室に入って、基本的には一回生と同じように授業を聞いてちょこちょこ先生の補助をする」というようなものでした。あんまり「これをしなきゃ」とか「チューターはこういう役割だ」とか具体的なものはなかったように思います。一番大切なのは「授業中教室にいること」でした。授業内容によっては、グループディスカッションに潤滑油的な助言をしたりしつつ見守る、というようなものも入ったりはしましたが。

実際の業務内容としては、おそらくティーチング・アシスタントに近いと思います。他学部の友人にチューターの話をするるとたいてい「それ TA と一緒なの？」と聞き返されます。一応名称は違うが業務内容はたぶん似たようなもので、それは今でも疑問です。事務的な補助役割なのか、授業進行的な補助役割なのか、もしくはその両方なのか。もちろん、辞書のような定義などあるわけでもないし、そもそも必要もないのかもしれないのですが。その曖昧さが、関わり方のバリエーションの幅の確保につながるというメリットも持ちますが、結局どんな存在として何をすればいいのかわかりづらいというデメリットも持つということなのだと思います。

その点を踏まえて全体を振り返ってみると、最初に、特に小クラスで先生ごとのチューターのポジションのイメージを聞く場があったらよかったかなと思います。その先生がどんな授業をなさるつもりで、こういうサポートがほしいということまでお話しいただければ理想です。が、先生方は基本的にお一人で授業をされるのだからそこまで具体化した要望がなくても不思議はないので、せめて授業内容計画の具体的なところを構想だけでも聞かせてもらえたら、多少はチューターも存在の仕方のイメージがしやすいと思います。チューターをどう活用するのかという目標設定の内容にもよるとはいえ、あやふやなまま活用されずに終わるのはすごく勿体ないです。基本的な目標として、例えば「教室と一緒にいること」が役割のミニмум目標なのかマキシмум目標なのかというようなことを提示されると、ずいぶんやりやすいです。個人的には、この「教室と一緒にいること」がチューターたちにはミニмум目標、先生方にはマキシмум目標だったのかなと最後のみなさんでの振り返りで感じました。もう少し気づくのが早かったらよかったかなと思いました。

<今後のチューターまたは先生への提案>

小クラスに入る前に、授業に入らせてもらう先生と話す場を作ること。
 ちょっとだけお話を聞くくらいの簡単なものでも。